

カントの哲学と私の比較思想方法論

松尾宝作

I 序 説

一

私は昨年の本学会の創刊号に、「エンゲルスのテーゼ」と仏教の「五蘊皆空」の図式が完全に一致することを根拠として、新しい「比較哲学方法論」を提案したのであるが、その際わたしの方法論の骨組みを形成している三つのカテゴリー

- (1) 原型の設定
- (2) 法則の抽出
- (3) 発展の系譜

を、仏教の根本原理である「無我」「縁起」「空」(十二縁起と四聖諦)に、理論的に結び合せることによって、この方法論と仏教哲学との関係を、ほぼ明らかにしたのである。今回は主としてカ

ントの純粹理性批判と、私の方法論を比較することによって、近世ヨーロッパの認識論と、私の方法論との関係を明らかにしたいと考えるのである。

十八世紀の頃まではヨーロッパにおいては哲学(フィロソフィー)といえ、西洋哲学思想のみを意味していた。インド思想はヨーロッパのサンスクリット学者によって十九世紀初頭に西洋に知られたのであるが、その最初の間は、その当然うけるべき評価をうけることができなかった。ヘーゲルはその独自の「哲学史」においてインド及びシナの諸思想を、その主要な章において論ずることを拒み、これらの殆んど未知の諸文明の所産を、「真の哲学」が興起するための一種の序曲と見なし「真の哲学」なるものはギリシヤ人の創造になるものだと考え、インドやシナの思想家たちに「哲学者」という名を与えることさえ拒んだのであるが、

その態度は現今もなお行われている。(中村・比較思想論)

しかしこのような偏狭な独断は、常に正當な學問の進歩を障礙するもので、近世になって諸科學がそれぞれ一個の獨立した學問として成長すると、その最後にとのこされたものが哲學であり、學としての努力が続けられたにもかかわらず、いまだに眞の學として成立しないのが哲學であるという結果を招いたのである。従つて今日の西洋哲學には解決すべき重要な問題が山積している。人間とは何か。真理とは何か。自由とは何か。

しかし現代においては、人間の偏狭と獨断さえなければ、西洋の窓は大きく東に向つて開いているのであり、東洋の窓は世界に向つて開かれてゐるのであるから、互に有無相通することによつて、互の欠陥を充足することは決して困難ではないと思ふのだが、これが自由に行いえないのは何ゆえだろうか。これが比較哲學の最初の疑問である。

私はこの東西交流をさまたげている主な原因は、比較思想方法論の問題ではないかと思ふのである。これについて私はまず比較思想そのものを二つのグループに分けて考へて見る必要があると思ふのである。

それは

- (1) 比較のための比較思想
- (2) 學としての比較思想

を區別することである。三枝教授の「東洋思想と西洋思想」には、

比較思想について三種の方法論があげられているが、その第一と第二が、私のいう「比較のための比較思想」で、第三の類型的の系といわれているものが、「學としての比較思想」と考へるのである。私の考へでは最初ハワイの東西哲學者會議の頃までに待望された比較哲學は、むしろこの學としての比較哲學でなかつたかと思ふのであるが、ムーア教授等の異常な努力にもかかわらず、この方法の發見が未完に終ると、比較のための比較の方が、いつの間にか主流の如くなつたのでないかと考へられる。しかし第一と第二は互に代用しうる訳には行かないのであるから、困難であつても諦めればよいというものではない。

ところが、この第三の方法の目的とするのは「學としての哲學」であり、東西に普遍的のものでなくてはならないのであるから、ここでもしエンゲルスの定義(創刊号八二頁)をもととして考へると「思惟と存在の關係」の中から存在論が科學として獨立したあと、哲學の内部にとりのこされた「學の對象」は、人間の思惟構造を含む認識論だけということになり、そこに浮びあがつてゐるのは仏陀ゴータマとカントの哲學が目につく。そうしてこの第三の方法論がもしでき上つた場合に、それは世界哲學というより、むしろ一種の哲學概論のような役割を期待したいと思ふのである。

そこで仏教については創刊号で大略説明したので、ここではカントの哲學をテーマとして考へたいと思ふのであるが、カントの

哲学の研究の目標は何であつたか。それは、

(1) 認識論的主観主義（人間的立場の確立）

(2) 先天的綜合判断（数学の中の綜合判断—科学と哲学の關係）

(3) 學問と矛盾しない形而上學（価値判断）

このカント哲学の目標と、私の方法論の三つのカテゴリー「自覚判断」「認識判断」「価値判断」は奇しくも目的が一致するのである。

II 比較哲学の基本的な問題

今までは習慣的に考えられていた問題でも、よく考えて見ると不合理な問題がいくつもある。西洋哲学だけの場合は伝統的な考え方も知れないが、比較哲学となるとこれを予め明確にしておかなくてはならない問題がある。「科学と哲学」「事と理」「觀念論と唯物論」等の根底にある不明確な問題である。

一 科学と哲学

哲学はその答えによってよりも、その問いの形によって区別せられるという。

What is it?

この問いは、科学及び哲学の全面に渉る普遍的な問いの形であるから、この答えの中には科学も哲学もふくまれている訳である。ところがこの問いの中には実は二つの問いがふくまれている。

(1) 「イット」とは何か

(2) 「イズ」とは何か

という二つである。このことは、数学の方程式を例にして考えるとわかり易い。

数学の方程式も一種の認識論で、自然数というのは、量だけによって整然と秩序だてられた概念の系列であって、式というのは必ず $a + b = c$ 。分析知と綜合知の矛盾の自己同一、という形をとるものであり、これが人間の先天的図式「感性・悟性・理性」の働きと完全に一致していなくては人間は方程式によって、合理的（人間的合理的）にものを考えることはできないのであって、カントの言う如く人間は方程式によって総合的にも、分析的にも推理し、判断できるのである。

そこで話を「イット」と「イズ」の問題に戻すと、この二つの問いのうち「イット」の問題は、この方程式の一方、多か、いずれか一方に未知数 x が含まれていて、その答え（判断）が問われているのであるから、全く科学的な問いであり、数学的な問いである。しかし方程式は（事としても、理としても働く）分析判断だけでなく、綜合判断（帰納判断）も可能なことは明らかである。次に「イズ」とは何か、という問いは、科学的にものがあるという、その判断の根拠が問われているのであるから、これは人間の思惟構造が問われているのであり、正に哲学的な問いなのである。

このことをエンゲルスのテーゼによって考えると、第一テーゼの「思惟と存在の関係」が問われているのが、「イズ」の問題であり、第二テーゼの「自然か、精神か」というのが「イット」の問題であり、数学的な答えなのである。しかるに従来の西洋哲学においては、この「イット」と「イズ」の問題を、現象と本体として取扱ってきているのであるから、このような形而上学の残渣がなお現在でもうけつがれているということは、現代西洋哲学に非学問的な一面が残されていることを意味するのである。

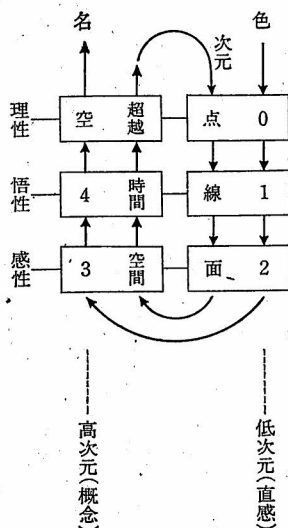
二 名色の問題

「図形のない幾何学は解けない」ことは誰でも知っている。また「百聞一見に如かず」ということも知っている。しかしそれがなぜかということとは、余り誰も考えないようである。現にデカルトやスピノーザは、図式のない幾何学を範として、哲学を立てなおそうとしたが、失敗に終っている。カントは「内容なき思惟は空虚であり、概念なき直観は盲目である」と言っているが、人間は本来にカントの言うように、概念だけで直観し、思惟しえられるものであろうか。特にそれが人間の「思惟と存在の関係」という人間がかつて見たこともない思惟構造を問題にしているとき。

エンゲルスのテーゼを見ても明らかのように経験的直観が、そのまま第一テーゼであり、無意識の深層心理であり、それが分析的に一つずつ概念として引き出されたものが、第二テーゼであり、形而上学であると知ったら、このような誤りを何百年も、何千年

も繰り返させた原因は、どこにあるのだろうか。

私はこれについて、仏教の表現に「名色」の概念のあることに注目したのである。その理由は、われわれは概念で直観したり、思惟したりするのではなく、色（低次元）と、名（高次元）とは直観と思惟に対し別々に働くのではないかと考える訳である。



右の図式は「色」（直感）は、点・線・面という低次元に始まり、「名」（概念）は、空間・時間・超越（空）という高次の思惟能力に順次に移行するが、互に図式の如く、アンタゴニズム（逆方向）に組み合わされて、先天的図式を形成するとすれば、次元と照応した法則の根源が考えられる。このようなことが考えられる理由として、

一 人間の認識は、人間自然と天然自然との認識の法則が、光と三原色の関係の如く一致するところがなくてはならぬ。単なる

空間・時間だけで認識できると考えるのは、誤りでないか。もしそうなら、物の形、点・線・面というものは人間は認識できないはずであるのに、どうして可能なのか。

そうしてここに図形のない幾何学の秘密の鍵があるのでないか。

二 私はこのように考えて、原型の設定に図式を用いることを思いついたのであるが、実際問題として、図式なしに脳の先天的構造を理解することは困難である。われわれは長い間この図式のない幾何学を、哲学という名で強いられて来たのではないだろうか。

三 図式には幾何学的・代数学的記号的図式及びインシド的譬喩的図式がある。

四 算術や代数の方程式は、一種の図式論であるが、それが脳の先天的図式と一致するところに、算術や代数が成立する秘密があるのである。

私は比較哲学方法論において、この図式論を採用することによって、「東洋の直観と西洋の形而上学の関係」を明らかにし、東西比較哲学の基盤を確立しえたと考えている。

Ⅲ 私の方法論と性格

一

私の方法論の骨組みをなしている三つのカテゴリー、すなわち

- (1) 原型の設定
- (2) 法則の抽出
- (3) 発展の系譜

は、実は峰島教授の論文からヒントを得たものであるが、これは氏が自然科学系の比較学を、抱念に研究して得られた結論で、私にとっては特に貴重な資料である。

自然界の方法を、このように、きれいに三つのカテゴリーに分類できるとしたら、これをそのまま「一心万法」ともっていったら、哲学（認識論）になるのであるが、実はこの辺が東西比較哲学の最も説明の困難な焦点であって、これが仏教では古来「自覚」といわれている場所であるから、私にもこれがうまく説明できるかどうかは判らない。とにかく平生仏教の言葉として「一心万法」ということは聞きなれているが、実は自然界の方法を、このように三つのカテゴリーに整理できるということを、私は今まで思い至らなかつたのである。ところが西洋哲学では余り聞きなれない万法が三つのカテゴリーに分類できるという峰島氏の論文を見た瞬間、「一心万法」という言葉が私の脳裏をかすめたのである。万法を三つのカテゴリーに分つものは何であろうか。それは一心ではないか。

ここまで来ると後は割合い推理が案である。それはエングелスのテーゼを想い起せば、明確に示していることだからである。その方法を万法と考えている哲学とは何であるか。それはエンゲル

スの第二テーゼで、形而上学と称するが、実は悟性的な分析知にすぎないのであるが、分別知が成立するためには、それ以前に直観知がなくてはならないので、既にエンゲルスの第一テーゼが、直観知として、また、カントのいわゆる先天的構想力として人間には図式的に備っているものであり「一心万法」と把握した哲学は、実はこの、第一テーゼに当るもので、万法は一心であり「思惟と存存の關係」はそのまま「悟性・感性・理性」といい、先驗的構想力となつて、万法は一心であり、第一テーゼと第二テーゼは、一体となつて意識されることを、自我の「自覚」というのである。故に自我の自覚は、同時に法の自覚である。仏陀正覺を伝える「ウターナ(自説経)」によつて何えは

「まこと熱意をこめて思惟する聖者に
かの万法のあらわれきたるとき

彼の疑惑はことごとく消え去れり

縁起の法を知れるが故なり」

この辺に「一心万法」が読みとられなくてはならないのであろう。この「原型の設定」と、われわれが言っている先驗的構想力は、単に東洋哲学だけに現れる「自覚」でなく実にエンゲルスの第一テーゼが、そのままあてはまるもので、それを東洋の直観(エンゲルスの第一テーゼ)と、西洋の形而上学(第二テーゼ・分別知)に分けて考えたことは、両方の哲学の誤りであつて、この両方を併せて考えると、やっと一人前の完全な「自覚」に達しうるのである。

ある。

二

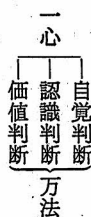
一心万法というと、一心と万法の合成語のように考え易いが、実はこの一心と万法は別のもではないのである。人間が直観したり、思惟したりするには、それに相当する思惟構造をもつていなくてはならぬ。カントはこれを産出的構想力と言っているが、それは「思惟と存在の關係」であり、「感性・悟性・理性」の綜合の働らきであるから、これが先驗的図式でもあり、一心でも、万法でもある訳である。華嚴經に「心・仏・衆生三無左別」という命題があるが、おそろくこれと同じことを言つたものであろう。一心と万法と自覚とは、区別のしようがないものである。もしも心という器物に、万法を盛りあげたら、この食べ物は、一心であるうか、万法であるうか。ここに単なる論理主義と「自覚」を語る哲学体験の表現には、差がある。西洋哲学は論理主義だから論理は明白なようだが、哲学の論理は自覚を語ることを目的とするのであるから、単なる論理は論理ですらないことになる。そこにソフィストと眞の哲学は異なるのである。

「感性・悟性・理性」を綜合した働きが、実は先天的図式とか、産出的構想力とか、一心とか、いろいろ言われるのであるが、これを、そのまま「思惟と存在の關係」と書けば、それは一心だけでなく、そこに一心のなかに万法が加わっているようにも考えられる。これを更に左図のように展開しても、一心は万法なのであ

る。



この図式の展開は、既に創刊号で明示した通りであるが、これを簡単にすれば



ということであつて、全体から見ても「一心万法」ということであるが、これを数学の方程式と考えれば、一心と万法は、式と答えという関係になるから、一心万法は普通の原理ということであり、数学を含めた弁証法の原理であるということになる。そうして一心万法ということは、人間の立場から一切を合理的に考えることである。

このような一心万法という見方は、仏教の側には、その例が極めて多いので例えは、

原始仙教 諸法無我 諸行無常 涅槃寂靜

中論 無我 緣起 空

涅槃經
法身
般若
解脫

というように、その実例は枚挙に暇のない程であるが、西洋哲学では存在論の立場をとることが多い関係で、この種の例はあまり

見られないのである。その中にあって、エンゲルスのテーゼは、この第一テーゼと第二テーゼを比較して見ると、実に見事に認識論（第一テーゼ）と、存在論（第二テーゼ）を、無意識のうちに分析して提示しているところに、深い意義があり、西洋の論理主義の哲学のうちにあっては極めて稀有な例証というべきである。またカントの概念とカテゴリーの關係も、

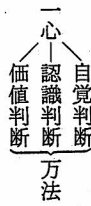


として考えれば、見方によつては「一心万法」の一つの例証で、彼の哲学が認識論の立場であるだけに興味深いものがあるが明確でない。しかしその点万法を、この三つのカテゴリーに明確に分類しうることを西洋哲学の中から発見した峰島教授の研究は、存存論と認識論の境界線を示すもので、貴重なデーターと言わなくてはならない。

三

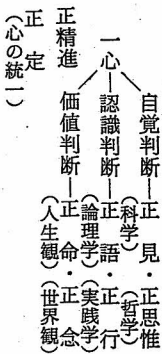
それでは、この一心万法というのは一体何であるのか。これを
会得すれば私の方法論が、比較哲学方法論として、如何なる働
きをするかということが了解できると思うのである。私はまず最
初に哲学の定義として、エンゲルスの第一テーゼを採用した。そ
れは「存在と思维の關係」であり、それがそのまま「感性・悟性
・理性」という先天的構想力であり、先天的図式であり、一心で

ある。



一心と方法の関係は、図式論で説明した通り、方程式と答えの関係、を連想すると考えやすい。そうしてその方程式の原型は一つであっても、働きは三種に区別することができる。それが右の図式に示した通り、三つのカテゴリーである。いわば一心は、その器物であり、方法はその中に盛られた内容である。自覚というのは、この器物と内容が一体になっていることを言うのであるが、エンゲルスの第一テーゼと第二テーゼは、これが別々になって岐れているのである。この自覚のないことが存在論の特徴である。

従って認識論（自覚論）の場合は、判断の内容をいくらでも拡大できるのであって、それが仏教で八正道といわれるものである。一心万法の拡大されたものである。これを示すと、



このことは、人間学と知識学の全面を含むもので、哲学は人間学でなくてはならぬことを示すものであり、人間の自覚がなくては、

一切の学は存在し得ないことを示すものである。

IV カントの哲学について

一

カントは哲学のために哲学を行ったという型の哲学者でなく、明らかに近世哲学の課題を課題として哲学した哲学者であり、学としての哲学を意識的に建設しようと試みた、哲学者であって、それは彼の純粋理性批判の目標である二つのテーマに明瞭に示されている。

(1) 先天的総合判断は如何にして可能か

(2) 認識論的主観主義

これは中世形而上学的伝統を伝える哲学に対しては正にコペルニクスの転換と称すべきものである。

(1) 先天的総合判断

彼に言わせると今までの哲学は、この先天的総合判断というものを全く考えることができず、そのために誤りに陥ってしまった。しかし彼によると、それは既に数学において成立しているという。先天的総合判断のない分析判断だけでは、正当な判断ができないというカントの洞察は正しい。しかし彼は総合判断を求めるのに、一心即ち「感性・悟性・理性」を粉々に分析してその分析の中から、総合を求めるという矛盾を犯した。もし彼の直観が感性だけでなく、一心がそのまま働いた直観であつたら、彼の意図は成功でなく、一心がそのまま働いた直観であつたら、彼の意図は成功

していただであらう。

(2) 認識論的主観主義

カントによれば、われわれの主観のうちに先天的形式があつて、これによって対象を構成するという。「認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従うのだ」と彼はいう。これは一見背し難い表現のようだが、それは一方的にのみ聞くからであつて、例えばテレビの映像がなぜ写るかを考えるとき、それはテレビの中に一定の形式があつて、対象がこれに従うのだと考えて少しも無理がないのである。しかし彼の哲学には西洋哲学の伝統のためか、彼の哲学には一心の「自覚」というものがないから、一心の内容である感性・悟性・理性がづねに増減動揺するのである。認識論というのは主体の学であるから、その主体が安定しないのでは何を論じているか判らないことになる。しかし彼が課題とした

(1) 人間的立場の確立

(2) 科学と哲学との一致

(3) 学問と矛盾しない価値判断

は今日においても哲学上の重要な課題である。

カントの認識論

「いかにして先天的綜合判断は可能であるか」これがカントの純粹理性批判の根本的な課題であつた。そしてこの問題の解決のためには当然カントは、われわれ人間の主観の中に先天的な認識形式の存することを想定しなければならなかつた。

この主観のうちに先天的認識形式の存在することを想定して、この立場から一切の哲学すなわち「思惟と存在の關係」を説明しようとするのが、認識論的主観主義の立場であるのである。従来の形而上学的立場や合理論の立場の哲学は、この人間の主観のうちに備わっている認識形式を合理的に考えようとせず、存在さえ論ずれば、認識はおのづから先天的に与えられるかの如く考えていた。従つて人間の認識形式である「感性・悟性・理性」といった区別ですら、カントに至つて漸く形を整える有様であり、更にこれらの綜合の働きによつて如何なる認識の先天的法則が現れるかも明らかでない。

カントの認識論は「内容なき思惟は空虚であり、概念なき直観は盲目である」という單純なものであるが、初めに想定した人間の認識能力の中から、何ゆゑ理性をのけものにしたのか。元來カントが認識の成立のためには悟性のみならず、感性的直観が必要であると考へたのは、經驗論的哲学の影響によつて合理論的哲学の欠陥を見抜いたからである。悟性のみによつては、われわれは概念の分析を行い、分析判断を作ることができるかも知れないが、決して綜合判断を作ることができないということを洞察したのである。そして理性の統制的使用こそ綜合判断の唯一の道であることはカントは充分知つてゐるのに、どうして直観を感性・悟性・理性の綜合判断にしないで、感性に限定した直観にしたのか、その理由が判らない。われわれは直観によつてのみ、主語概念を、

その中に含まれていない新しい述語概念と結合できるだけであるのに。

二

哲学が「思惟と存在の關係」を明らかにすることを目的とするものならば、認識論的主観主義の立場に立ったカントの純粹理性批判において、人間主観の三要素である「感性・悟性・理性」が、完全に顔を会わせるのは、この先験的弁証論に至ってのことで、それ以前のカントの認識論は、感性と悟性のみであり、特に綜合判斷に必要な直観は、感性のみに制限されている。認識論という人間の立場に立つものが、立っている主体の構成が不定で、これが始めて顔をそろえると、今度は本来の認識論でなく、先験的仮象を暴露する仮象の論理に向けられるということは、大きな矛盾である。カントは従来の形而上学を否定したとされているが、それはこの先験的弁証論によるのであるが、カントは単に形而上学を否定したのではなく、カントには哲学上の立場から見て矛盾した意図があったと思われる。それはヒュームの経験論によって否定せられた形而上学を物自体の世界に復活するために、人間理性をもってこれに代らしめようとしたものである。しかし形而上学と認識論とは両立しない。「本体論から法則論へ」これは近代科学が発展した根本原理で、それは裏をかえせば、「形而上学から認識論へ」というコペルニクスの転換である。カント哲学の最初の意図が、この人間的立場の確立にあったことは明らかである。

しかるにこの認識論の立場から、人間の先天的思惟方式と全く一致する論理を、最も早く発見したのは（無意識ではあるが）それは哲学ではなく、実は数学であった（本誌創刊号八六頁）。近世における自然科学の成功は、多くの哲学がそれを模倣して哲学体系を樹立しようと試みる程はなばなしかった。しかし合理論の哲学も経験論の哲学も、いまだ真に近世自然科学の本質を把握したものではなく、それは近世自然科学の根底に存する「人間的立場の自覚」ということを洞察せず、単にそこから把握できる論理のみにとらわれて、新しい哲学を樹立しようとするものであった。その新しい哲学というのは、科学や数学に背を向けた古い形而上学を意味する。しかしそれはいわゆる「まぶたの母」のようなもので、それが何であるかは誰も知らないのである。その証拠に西洋哲学には定義がないのである。カントは認識論的主観主義を出発点とした。しかし彼は $7+5=12$ という方程式が、 $a+b=c$ という普通の認識論であり、それが普通の認識論であるということとは、その根本図式が、人間の先天的図式と一致するからであるということに気付かなかった。即ち認識の法則の中に、人間的立場を洞察することができなかった。「一心万法」という「自覚」がなかったのである。もしカントが、この弁証論に示したように始めから人間の理性を感性・悟性ととともに、人格の要素に加え、弁証論を存在論でなく、法則論として導いたとしたら、仮象の形而上学は、すべて認識論としての法則論（弁証法）に転化して、

三つの仮象はそのまま、自覚判断（人格）、認識判断（真理）、価値判断（善の選び）というように、彼の初の意図に一致し、彼の哲学の白眉とも言うべきこの弁証論において彼の「学としての哲学」が完全に実現していたと考えられる。

しかしカントが意図したこの「学としての哲学」の意図は、永久に消してはならない学問の根本課題であるとともに、自覚のない単なる論理のための論理は、それが如何に表面的に整備されたものに見えても、近代のソフィストを作る以外のなにものでもない。しかし今日の西洋哲学の全体的方向としては、カントの先例にもかかわらず、再び形而上学的存在論の方向をたどるか、或いは「人間的洞察を欠いた科学論」に低迷していることは、遺憾なことであるが、同時に、比較思想の必要を痛感するのである。

（まつお・ほうさく、比較哲学、金沢大学社会教育研究室）